認定特定非営利活動法人
RASA-Japan　ニュースレター
2026.5
Vol.50

おかげさまで50号を迎えました

理事長　藤井　忠子

RASA-Japan（以下、RASA）が今日まで活動を継続できておりますのは、活動の趣旨をご理解いただき、長年に亘りご支援くださった会員・寄付者の皆さまのおかげです。ここに、27年間活動を続けることができましたことを深く感謝申し上げます。

RASAの活動は1999年にシーランド教授が学生や社会人に呼びかけ、フィリピン農村地域でホームステイをしながら学校建設活動から開始。私は2002年初めてこの活動に参加、次第に支援者が増える中、公に多くの方々から資金獲得のため、2009年NPO法人化さらに2017年に「認定NPO法人」認可登録、2022年にはこの資格の更新を経て現在に至ります。

これまでに建設した学校は32校です。2011年ここサウスビルⅠ小学校の校舎建設中に飢餓児童への給食支援を緊急依頼されとりあえず、校外で開始。4年間の継続中に資金の大きな不正流用発覚して中止。同年2015年学校長に依頼して、5、6年生100名の休みがちな生徒が通学し卒業できるよう学校給食として発展させました。コロナ禍で一時中断を余儀なくされましたが、登校再開後の翌年秋からは、極貧家庭への食品配布を、全学年から20名ずつ合計140世帯へ月2回実施しています。

この支援が円滑に進められるのは、現地支所責任者デニス氏が予算内で最多の配布ができるように綿密な市場調査、購買、搬入、正確な会計管理とRASAへの報告のおかげです。更に近隣の人々のボランティア活動によって、月2回140袋の準備が毎回スムーズに継続できており、人々の自主的な協力に感謝しております。

また、RASAの活動に参加したボランティアは、今春のStudy Tour14名を含め、延べ800名となりました。活動後もホームステイ先のホストファミリーとの交流や、ボランティア同士の繋がりが続いているという報告も多く寄せられています。国や文化が異なっても、人と人との繋がりや理解が続けられていることは、現地支援と並び、RASAの活動の目的と大きな喜びです。

フィリピンと日本の交流は室町時代にまで遡り、移民による日本人街も存在していました。しかし第二次世界大戦中には、日本の侵略により100万人以上のフィリピンの人々が亡くなり、日本兵も補給のない中で30万人以上が戦死した歴史が示す悲劇がありました。戦後、日本はフィリピンへの賠償と支援に努め、近年の日比関係は「歴史上最も緊密」と言われるほど強い特別なパートナー関係となっています。

戦後80年が経った今も、フィリピンの人々が示す**「許す・寛容・支え合う」**という姿勢は、長い植民地時代を互いに助けあってこそ生き抜いてこられた歴史に根ざしているもので、その前向きな生き方は、現在も大切に受け継がれています。今回のボランティアからも、現地の6年生と接する中で、日本への友好や憧れの強さを感じ、帰国後も交流を続けているという声が寄せられています。

現在フィリピンでは、中東情勢の悪化に伴う原油供給不安から、ほぼ全部を中東に依存しており、燃料備蓄が約1か月半という危機に直面し、深刻な影響が出ています。

1. ガソリン・電気などエネルギー価格の高騰
2. 交通機関への深刻な影響
3. 電気料金の上昇と節約強化

マルコス政権は3月24日に非常事態宣言を発出し、公共・民間の経済活動の縮小を指示しました。学校教育にも大きな影響が予想されています。物価上昇は特に貧困層を直撃し、プロパンガスは1.6倍、食品価格も殆どが高騰。3月の食品配布では、米価の上昇で主食の米は通常の5Kg配布とし、缶詰や卵の配布量が減る予算内での配布結果でした。ガソリン1Lが100ペソ（約280円）を超え、主要道路でも車両が激減するなど、産業・食料・交通の各分野に影響が広がっています。

このような状況の中で、RASAの支援を続け、現地の子どもたちと家庭の生活を守るためには、これまで以上に安定したご寄付が必要となっております。この窮状を救うためにどうか食品配布の量と成長期に必須の栄養食品を配布出来ますように、どうか引き続き、ご支援を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

一日も早く戦争が終結し、世界中の人々が平和で安心して暮らせる日が訪れることを願っております。

フィリピンの子供たちとの交流を未来につなぐために

～「Study Tour 2026」に行ってきました～

ポストコロナの第2回目のStudy Tourとしてカブヤオ市のサウスビルⅠ小学校を活動拠点として2月15日から18日間の日程で実施しました。今回の目的を①異文化体験　②環境について考える　③平和について考える、の3つとし昨年11月からの4回にわたる事前研修を行って本番に備えました。Study Tourの柱である一人1家族へのホームステイと小学校での授業や食品配布支援に加え、今年は近隣企業を見学したり一泊二日のマニラ旅行を行うことにより、学生ボランティアの皆様にはより多くのことを体験してもらえるよう企画しました。以下に活動ごとの結果について報告します。

◆ホームステイについて

ホストファミリーはRASAフィリピン支所代表のデニス氏のアレンジにより決定。昨年から継続の8家族と今年新たに引き受けていただいた6家族の皆さんが2月15日の到着日の夜にデニス氏宅に集合しボランティア学生の皆さんをあたたかく迎えてくれました。

これらのホストファミリーはカブヤオ市の3つの居住地域に分布しているもののデニス氏を通じてお互いのコミュニケーションがとれており、小学校への送迎をはじめ日常生活のあらゆる場面においてみんな協力的で、学生たちを家族同様に受け入れていただきました。事前研修で昨年のホームステイでの生活を紹介したり日本との習慣の違いなどを説明してはいましたが、日本語の通じない家庭にいざ一人で入ってみると日本との違いに最初はなかなかなじめない人もいたようですが、ホストの優しさや気遣いによって徐々に溶け込んでいったようです

そんなホームステイを通してフィリピンの家族関係や地域コミュニティーとの付き合い方など日本との大きな違いを感じ、いつも明るく前向きでお互いが助け合って生きるフィリピンの人々から多くのことを学んだようです。このようなホームステイができたのは学校建設や食品配布というRASAのこれまでの活動がこの地域で認められているからであり、来年はぜひうちでホストをやりたいと言ってくれる家も何件かありました。

◆小学校での授業について

サウスビルⅠ小学校にて昨年同様6年生を対象に授業を行いました。今年の6年生は16クラス約700名で、この全クラスを対象としてそれぞれ3時間ずつ延べ48時間を学生4チームで分担しました。子供たちとの深い交流を図るためチーム毎に同じクラスで授業をすることにこだわり、日本語の授業を2時間、日本の伝統的な遊びの授業を1時間行いました。4人または3人の学生チームがそれぞれ独自の授業構成を考えて自ら作成した教材を使って授業を進めました。

最初の授業については事前研修で準備をしていったものの、本番になると生徒たちの興奮状態に圧倒され、どのチームもそれを鎮めるのに苦労していました。子供たちは日本語を学ぶことに熱心でまた吸収も早く、教える側も毎日の反省会の中で次の授業をより良くすることを話し合いその都度改良していました。1チーム12時間の授業も回を重ねるごとに進化し、また生徒たちとの交流も深くなっていきました。中には生徒たちから慕われて手紙や手作りのマスコットなどをもらった学生も何人かいました。授業でのふれあいにより、これまで以上に日本が好きになった子どもが増えたことでしょう。また学生にとってもフィリピンで授業を行ったというかけがえのない体験が将来どこかで生かされるものと信じます。

（担当：貴船）

◆受給家庭訪問と食品配布(2/17・26)

収入が少なく食べ物にも事欠く家庭へ、RASAは現地ボランティアの協力で毎月2回食料の支援をしています。これはRASAのもっとも重要な事業です。

その状況を視察するため、学生たちは2グループに分かれ、いくらかのお土産をもって各家庭を訪問しました。

親が病気や失業、不在で祖父母が子供の世話をするなど厳しい状況を聞くとともに、掘っ立て小屋のような粗末な住まい、クド一つで調理する台所など、日本では考えられない生活状況に学生たちは言葉を失っていました。

また別の日には、食品配布のボランティア活動にも従事しました。お米や缶詰、インスタント食品、卵などを世帯ごとに仕分け。受給者の受付や手渡しなど、ほぼ半日かけて作業を行いました。

学生たちはボランティア活動の喜びを感じているようでした。

◆企業訪問(2/25)

昨年、学生たちとのツアーふりかえりのなかで、フィリピン進出日本企業の見学を話題にしたところ、非常に関心が高かったのを踏まえて企画しました。

訪問先は、自動車部品のトップメーカーとして有名なデンソーフィリピン。社長から現地との共栄を目指す企業方針や、現地採用者の幅広い経営参画の状況など説明を受けたのち、工場を案内していただきました。スタッフの流暢すぎる英語の説明にやや戸惑った？学生たちですが、企業の生産管理の質の高さには驚嘆させられたようでした。

また、午後からはイバーン市の農場で新規事業の水耕栽培を見学。今後予想される食糧危機への意欲的でユニークな取り組みに大いに関心を持った学生もいました。

◆大都市マニラの訪問(3/2・3)

ツアーの終盤は、親しくしてくれたホストファミリーや子供たちに別れを告げ、フィリピン最大の都市マニラへと移動しました。

ここでは、かつてスモーキー・マウンテンと呼ばれたトンド地区を訪問。ゴミの山からプラスチックなど有価物を収集することはなくなったものの、多くの人々が極貧の生活を強いられる一帯を見学しました。

その一方で、ほとんど車内からでしたが、一部の富裕層が住むマカティ地区を見て回りました。まるで欧米の先進都市かと見まがうほどの豪華さに、ほとんどの学生が「フィリピンの社会の厳しい格差を感じた」と感想を述べています。

また、フィリピンの歴史をジオラマでわかりやすく展示するアヤラミュージアムでは、スペインなど多くの国と戦わざるを得なかった悲惨な歴史や先の大戦では日本が支配し甚大な被害を与えたことを学びました。

◆結び

こうしてStudyTourを振り返ってみると、新しい体験の中で学生たちには多くの気づきがあったことを実感し、スタッフとしてうれしく思います。

ただ、引率者として配慮が足りなかったことや、訪問先が遠隔地で国民性も違うことからスムーズにいかなかったこともあり、今後の課題としてしっかり検討すべきと考えています。

また、テーマ②環境について考える、も具体的な活動を組めませんでしたが、スタッフレベルではごみ分別について現地と協議してきました。詳細はP.4上段参照。

（担当：後藤）

環境改善について

ニュースレター48号（2025年8月）で取り上げ今回のStudy Tourの目的として掲げた環境への取りくみについては、この期間中にスタッフがリンビル地区のリーダー達との話し合いの機会を持ち、名古屋市や豊明市のゴミ回収のやり方や仕組みを紹介しました。フィリピンでは排気ガス規制のためゴミの焼却ができないという点が日本と大きく異なりますが、この情報をもとにフィリピン流のゴミのリサイクル方法を地域として考えたいと言ってくれました。また生ごみの堆肥化についてもすでに2家族が取り組んでおり、これを使ってマンゴの苗木が立派に成長していることを確認しました。（担当：貴船）

参加ボランティアの声

活動に参加されたボランティアの皆さまの感想や意見をご紹介します。

南山大学　M.Aさん

フィリピンの優しさと日本の優しさは違う。帰国してすぐ、私はエレベーターに乗ろうとしていた。目の前でエレベーターのドアが閉まるのを見て、次を待たないといけないな、と思った。しかし、そのエレベーターに乗っていた人が、私の存在に気づき、ドアを開けてくれた。そして、「乗りますか？」と声をかけてくれたのだ。その時、私はこれが日本の優しさだと気が付いた。フィリピンに行ったからこそ、気が付けたのだと思った。

南山大学　S.Aさん

私は何度かフィリピンへ行ったことはありましたが、ここまで密接に現地の人々や生活と関わるのは初めてでした。特に現地の子供たちは学びに積極的であり知識の吸収力が半端ではないと感じました。私たちは日本語を教えましたが、学習環境が整っていないからこその学びへの貪欲さは日本人として彼らから学ばないといけないなと感じました。

南山大学　M.Kさん

語学力の向上を前提としつつ、私はそれ以上に、現地でのボランティア活動や日常生活を通じて、フィリピンならではの価値観や文化を体験することに魅力を感じ、本プログラムへの参加を決意しました。実際にホームステイや学校を通して多くの人々と関わりながら、言語だけでなく多様な考え方や視点を身につけることができました。

中部大学　S.Jさん

僕はこのボランティアを通して、本当の豊かさとは便利な物の多さではなく、人とのつながりや思いやりだと感じました。スモーキーマウンテンで見た光景や、厳しい環境でも笑顔で過ごす人たちが印象に残っています。この目で見たもの、「経験」を忘れずに行動していこうと思います。

南山大学　A.Iさん

フィリピンの人々はいつも笑顔で、小学校で授業を行った際も、子どもたちは明るく学ぶことにとても意欲的でした。日本では整った学習環境がある一方で、勉強に対して前向きな気持ちを持ち続けることが難しいと感じる場面もあります。しかし、フィリピンの子どもたちは、限られた環境の中でも純粋に学ぶことを楽しんでいました。その姿から、日々の生活や学ぶ機会を当たり前と思わず、前向きな気持ちで物事に取り組む姿勢の大切さを学びました。

東海工業専門学校　H.Oさん

ホストファミリーや現地の方々の温かさに触れ、多くの思い出ができました。英語が苦手で初めはとても不安でしたが、一緒に食事をしたり、何気ない会話をする中で、言葉が完璧でなくても気持ちは伝わることを実感しました。またフィリピンを訪れた時には、もっと英語でコミュニケーションが取れるよう、これからも学習を続けていきたいです。

南山大学　S.Kさん

フィリピンのポジティブな国民性には学ぶべき点が多くありました。楽しい事は躊躇せず楽しみ、それを周囲と分かち合い、誰かが楽しんでいたらそれを受け入れる寛容さを持つフィリピンの文化を素敵に感じました。日本の「周りに気を配る」「迷惑をかけないようにする」という文化も素敵ですが、自分の感情や人生を大切にするフィリピンの考え方を、私たちも少し取り入れても良いのではないかと思います。

南山大学　S.Gさん

フィリピンでの思い出は、日本では体験できない異文化に触れられたことです。特に、食文化や生活習慣の違いが印象に残っています。地元の伝統料理を食べ、現地の人々と交流する中で、異なる価値観やライフスタイルを学びました。また、貧困家庭の視察を通じて、彼らの苦労や日常のリアルに触れることができました。見ることによって、単に知識を得るだけでなく、彼らの生活に対する理解が深まり、私自身の視野が広がったと感じています。この経験は、今後の人生においても大きな財産になっています。

南山大学　S.Mさん

フィリピンでの18日間はあっという間でした。最初は現地の生活に戸惑うこともありましたが、優しいホストファミリーや地域の方々のおかげで楽しく過ごせました。
メインの活動は現地の小学生への授業や貧困家庭への支援でした。
家に帰るとおやつを用意してくれたり、友達の家に遊びに行ったりしてかなり充実していました。帰国してからもホストファミリー、地域の方々、生徒達とメッセージのやりとりをしていて幸せです。

南山大学　A.Fさん

今回のボランティア留学に参加し、日本では経験できない生活習慣や価値観に触れることができました。最初は文化の違いに戸惑うこともありましたが、次第にフィリピンの魅力や人々の温かさに気づくようになりました。この経験を通して、日本とフィリピンそれぞれの良さや課題を学ぶことができ、自分にとって非常に貴重で意義のある経験となりました。

南山大学　M.Iさん

フィリピンの方々は陽気でポジティブで温かみにあふれていました。自然に人が集まり、笑顔で会話を楽しむ姿が印象的でした。
ホストファミリーと日本の自殺について話す機会があり、フィリピンでは宗教観や明るい国民性から自殺は滅多にないと聞きました。こうした会話を通じて日本とフィリピンの考え方の違いを学び、常にハッピーに行動する姿勢をとても素敵に感じました。違いを知ることで改めて日本の文化についても考える良い経験になりました。

南山大学　S.Yさん

フィリピンでの経験は、何より現地の人々との関わりによって形づくられました。言葉が十分に通じなくても、笑顔や気遣いで距離を縮めようとしてくれる姿に何度も救われました。彼らは物質的に豊かでなくとも、人との繋がりの中で自然に笑い、支え合って生きていました。その中で私は、幸福とは与えられる環境ではなく、人と関わり続ける姿勢の中に生まれるものだと考えるようになりました。この気づきは、自分の価値観を大きく変える経験となりました。

名城大学　D.Tさん

私は当初、自分の視野を広げたいとの思いで、RASAの活動に応募しました。
そこで感じたことは日本とフィリピンの文化、考え方の違いです。フィリピンには洗濯機や湯船がなく、シャワーもお湯は出ません。日本では当然のようにあるものがフィリピンにはありませんでした。ただ、それらのような便利なものはなくても、フィリピンの人々は苦しそうに生活するような様子はなく、むしろお互いが支え合って生活していました。技術がまだ日本と比べ、未達が故に、人と人とが支え合って生きているように感じました。
また、フィリピンには宗教が多くの人に根付いていると感じました。キリスト教には他人を尊重する教えがあり、そういったところもフィリピンの人の暖かさの由縁の一つでもあると思いました。この体験を通じて、行動することの大切さ、人の優しさを感じました。これからは家族はもちろん、初めて会った人にも優しくし、少し面倒臭いことでも、1度チャレンジすることを心がけていきたいです。

受給児童の声

食品配布を受けている児童や家庭から当団体や支援者の皆様へ宛てた感謝のメッセージや手作りのカードは、現地コーディネーターがその都度受け取り、出張の際にまとめて手渡ししてくれています。その一部をご紹介いたします。

○「児童に選ばれ本当にありがとうございます。私たちに与えてくださった全ての恵みに感謝します。」

○「小学校へ食糧支援をおくってくださり心より感謝いたします。特に苦しい状況下での温かいご支援は大助かりです。子供たちがきちんと食事できることは、私どもとって大きな助けとなります。」

○「RASAは勉強中の5人の子供たちにとって大きな助けとなります。頂いた米、缶詰、麺類、牛乳、卵に心から感謝いたします。神のご加護がありますように。あなた方を愛しています。」

○「ご支援をいただき、私たち家族のためにしてくださった全てのことに心から感謝申し上げます。」

○「あなたのプログラムに選ばれた中の幸運な1人です。私はあなたのプログラムに大変感謝しています。私だけでなく多くの他の人たちも支援が受けられますように。」

○「サマンサです。アトリン組4号室です。私に日本語を教えてくれ食べ物をくれて本当にありがとう。」（父親は廃品販売業、母親は夜勤、子供3人、廃品でできた家に住んでいるが目が輝き、学んだばかりの日本語で書いたノートをわざわざ私のところまで見せに来てくれました。その気持ちがとても嬉しく感じられました。）

○「RASAから食料品をいただき本当にありがとうございます。家族にとって大変助かります。これからもできる限りご支援をお願いいたします。私のような貧しい人々にとってこれからも温かい心で惜しみなく助けてくださいますように。」

●サウスビルⅠ小学校からRASAご支援者様へメッセージをいただきました。

「RASAのご厚意により校内で困窮家族や個人に生活必需品、食糧そして精神的な支えを提供することができました。皆様のご協力のおかげで、困難な時期に多くの方々が貢献してくださり、皆様の支援は大きな力となりました。」

●スポンサーシップ（現地で困窮する児童・家庭を個別に支援する制度）から、担当者より次のメッセージが届きました。

「学校内で困窮している個人や家族に、生活必需品、食糧そして精神的な支えを提供できました。皆様のご加護のおかげで、困難な時期に多くの方々が貢献してくださり、皆様の支援は大きな力となりました。」

◆悲惨な環境でも、向学心に目を輝かす児童

長い間休学していた、やせた背の低い14歳の女児が、訪問時に「6月から5年生として学校に通います。」と目を輝かせて訪問時に語ってくれました。今から登校を楽しみにしていると。

貧困やいろいろ事情があったことでしょうが、その子の表情から学びたいという強い意思を感じました。学校に通って学びたい。将来自分で自立したいとの強い意思を持っていること知り、応援したい気持ちで一杯になりました。　（担当：藤井）

フィリピンの学校教育姿勢

フィリピンの学校教育は、日本とは異なり「生徒の自主性を引き出す教育」が主流です。成績は公表され、優秀な生徒は表彰されメダルやリボンが授与されます。一方で、生徒のミスを叱責することは殆どない。授業は教科書に沿って進められますが、課題を与えて生徒自身に考えさせ、自分の意見を発表させるその意見に対して他の生徒がコメントを述べるなど、考える・話す・聞くことを重視した社会で必要な実践的教育が行われ、試験に役立つ教育ではない。

授業についていけない生徒や私語で聞いていない生徒にも、授業の妨げにならない限り注意せず授業はすすめられます。先生から声掛けをするのではなく、本人がやる気を見せたときにフォローする姿勢です。

◆教師の役割と尊敬される理由

教師の収入は低くありませんが、教育だけでなく生活相談に乗ったり、自腹を切って家庭の支援することもあります。教師が尊敬される所以です。

フィリピンの貧富の格差問題の解決への道

フィリピンでは、歴史的な背景から続く貧富の格差が、今も多くの人々の生活に影響を与えています。私自身、現地の状況を日々追いながら、その複雑さと長期的な課題を改めて感じています。私がこれまでに得た情報を整理し、皆様にも現状を知っていただきたくまとめました。支援には時間がかかるからこそ、その背景をお伝えいたします。

◆アジアでも突出して大きいとされる格差

フィリピンは、アジアの中でも特に貧富の格差が大きい国として知られています。その背景には、スペインやアメリカの植民地支配の時代に形成された、政治と経済を少数の一族(オルガルヒ)が掌握する構造が、現在もなお強く残っていることが挙げられます。

◆平等な社会への道筋を探る動き

こうした状況の中で、社会をより公平な方向へと変えていこうとする兆しが、若い世代を中心に少しずつ見え始めていると言われています。

1. 財閥や政治家の利権構造を可視化し、社会に広く知らせようとする動き
2. 政治家の世襲による既得権益を見直そうとする機運
3. 若者の政治参加意識の高まりと、選挙買収に応じない姿勢の広がり
4. 財閥間の競争が相互牽制となり、透明性を高める方向に働いていること
5. 教育水準の向上と、個人の自立意識の高まり

海外で働いたフィリピン人(OFW)は、現在人口の約10%(1,000万人超)にもなります。また、その海外からの支援額がGDPの約10%になり、輸入額が輸出額を大幅に上回る「慢性的な貿易赤字」構造にあるフィリピン経済を補填しています。他国での生活や民主的な社会を経験した人々が自国で、その経験を政治意識や社会参加に生かそうとする傾向も徐々に指摘されています。

◆世界情勢が直撃する貧困層

経済が第一に重視される世界の現状では、貧富の格差が広がり、弱い人々に広く直接影響しています。力による戦争の勃発で、世界が経済混乱に陥っている今、早く平和が取り戻せないかと願わずにはおられません。

先日、宇宙船から帰還した人々がこの地球のことを語る文章を読みました。私たちは地球家族として連携し、幸福の価値観をどこに置くかを今一度考えさせられます。

皆様にご理解いただき、フィリピンの貧困層に思いを寄せていただければ幸いです。（担当：藤井）

「ボランティア応援金」をお渡ししました

昨年ふるさと納税制度を活用したガバメントクラウドファンディング(GCF)　なごや『ふるさとNPOセレクト』に「ボランティア応援プロジェクト2026」で挑戦し、皆さまからの応援により補助金21,000円をいただきました。

ボランティア応援プロジェクト2026

この貴重な補助金をもとに、参加ボランティアの皆さまに応援金としてお渡しするプロジェクトを開始しました。

2月7日(土) Study Tour 2026第4回事前研修会にて、ボランティア14人の皆さまに「ボランティア応援金(1,500円/人)」をお渡しすることができ、実質的な参加費の自己負担軽減に繋がりました。

ボランティアと藤井理事長

ボランティアの皆さまからは、「現地の方々との交流を通して前向きな気持ちを持つ貴重な経験となり、ご支援に心より感謝申し上げます。」といった温かいお声をいただいております。

また、「現地で行う授業内容充実のため、日本文化を紹介する折り紙や小物類に応援金を活用させていただきました。」や、「ホストファミリーへのお土産として抹茶やお菓子、日本のキャラクターグッズ応援金で購入しお渡ししたところ大変喜んでいただきました。」など、応援金の活用についての報告も寄せられています。

これもひとえに、支援者の皆さまのおかげです。厚く御礼申し上げます。今後とも、温かいご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

(担当:宮嶋)

今後の活動予定

5月30日	定時総会開催予定
5月下旬	カブヤオ市から学校教育視察団来訪予定
6月下旬	フェスタジュニーナ参加予定(豊田市)

会員が減少傾向です！活動を支援いただける方、法人・団体を募集しています！

資料をお送りいたしますので、RASA-Japan事務局までご連絡ください。

※「遺贈によるご寄付」、「相続財産のご寄付」は、相続税が免除されます。お志のある方はご連絡ください。

RASA-Japanは皆様の会費と寄付金で運営されています

認定 特定非営利活動法人
RASA-Japan
理事長　藤井 忠子

〒468-0014　愛知県名古屋市天白区中平2-2627
TEL/FAX　052-803-1649
E-mail　info@rasa-Japan.com

郵 便 振 替 ：口座番号　00890-4-31185
受 取 人　特定非営利活動法人RASA-Japan
三菱UFJ銀行 ： 平針支店　普通　0037025
トクテイヒエイリカツドウホウジンラサジャパン

クレジット決済はこちら
会員　寄付

ホームページ
http://rasa-japan.com

YouTube JP　@rasa_japan　@rasa_japan